

皿に盛られたブドウの皮が剥かれ、種を取り除いた実だけが差し出される。まるで幼児に対する接し方に、わたしは頬を膨らませた。

「ローデリヒさん。わたしもう子どもじゃないんですけど」

わたしがそう抗議すれば目の前の伊達男、ローデリヒさんがふっと口元を綻ばせる。口元に、少し皺が浮き上がった。そうするといつもおしゃれで若々しいローデリヒさんが年相応に見える。

「オレにとってはまだまだお嬢ちゃんだよ。なんならオレが食べさせてやろうか？」

からかってくるローデリヒから皿を受け取り、実を口に運ぶ。甘酸っぱい味が広がって、思わず目を細めてしまう。

「はは、果物一つで上機嫌になりやがって。まだまだ子どもじゃねえか」

わたしは軽くローデリヒさんを睨みつけながら、無言でぶどうを咀嚼し続けた。

朝食を済ませ、お勤めにでかけるローデリヒさんを見送ってからわたしは家事に取り掛かった。ほうきで床を掃いていたら、ふと鏡に映った自分の姿が見える。すんとした、凹凸の少ない身体。少しなら胸やお尻もふくらんできたけれど手足ばかり長く伸びてしまって、もう大人なはずなのに、女性らしい曲線美とは無縁だ。

「……ローデリヒさん、いつまでわたしがいつまでも子どもみたいな体型だから手を出してくれないのかな。それとも、やっぱりお父さんに遠慮してるの？」

わたしの父は高名な軍人だったが、戦地でその土地特有の病にかかり、あつという間に帰らぬ人となってしまった。勇猛果敢な父があっけなく病に命を奪われたとの報せに、母は抜け殻のようになってしまった。元々身体の弱かった母は、父の死から間もなく後を追うように逝ってしまった。一人娘のわたしを

残して。

両親を立て続けに亡くして途方に暮れたわたしに、手を差し伸べてくれたのが父の部下だったローデリヒさんだった。

頻繁にわが家に遊びにきていたので面識はあった。けれど酒と煙草、おまけに女物の香水が混じった匂いを漂わせた、遊びなれていそうな男の人というイメージでわたしはあまり得意ではなかった。

そんな彼が喪服に身を包み、墓に花を手向けに来てくれた。そこからは酒もたばこも、もちろんむせ返るような香水のにおいもしなかった。墓の前で目を閉じて祈りを捧げた彼は、おもむろにわたしに向き直ってこういった。

「これからどうするか決まってるのかい？ フィーニちゃんがよければ、オレのところにくるか？」

「えっ」

「こんなオッサン、いやかもしれないけど。あんたの父ちゃんに恩返しする前にあっちに逝っちまったからな。アンタひとりの面倒を見るくらいの甲斐性はあるつもりだぜ」

「いや、それはさすがに……」

困惑して断ろうと口を開きかけたとき、紙のような真っ白い顔色と、目の隈に気づく。亡くなる前の母と同じ、悲しみに疲れ果てた顔だった。わたしがこの申し出を断ったらどうなるんだろう。楽しそうに父と飲み交わしていたお酒を、もう語らう相手をいないのに一人で流し込むんだろうか。

苦手な人のはずなのに、その姿を想像したらなぜか胸が締め付けられる。

「わかり、ました。よろしく願います」

わたしはそう告げて、自分より大きな、かさついた手を取った。こうしてわた

したちは、名目上の夫婦になった。

ローデリヒさんとの生活は、事前に心配していたよりもずっと居心地がよかった。家事はからしきだったローデリヒさんも、少し教えただけでメキメキ腕を上げて、そつなくこなしてくれるようになった。元々父もローデリヒさんのことは優秀だとよく褒めていたから、物覚えがよい人は何をやらせてもうまくやるらしい。もっとも父は、あれで軽薄な性格だけ直せば完璧なんだがと同時に苦言も呈していたが。

ローデリヒさんは女性慣れしているせいか、わたしのことを子ども扱いしつつも紳士的に振舞ってくれる。夫婦とはいえども寝室はもちろん別だし、入る前に当然ノックしてわたしの返事を待ってから入る。そうやって大切にされて、わたしはすぐに少しだけ残っていた警戒心を手放した。そうしてすぐに打ち解

けると、ローデリヒさんは頻繁にわたしの頭を撫でるようになった。

子ども扱いの延長なのだろうが、妙に心地よくて気づいたときにはわたしはすっかりローデリヒさんを好きになってしまっていた。一緒に暮らし始めて五年。思いを募らせるには十分な時間だった。

「わたしももう十八になったんだし、少しくらい積極的になってもいいよね……?」

そうと決まればさっさと家事を終わらせて、準備をしなければ。箒を握る手にもいつもより力が入る。テキパキと部屋を磨きあげて、わたしは小さな決意を固めた。

鏡とにらめっこして、最後の仕上げにリップを塗る。いつもより少し大人っぽいメイクをして、ローデリヒさんが好きな料理を作って時計を見る。もうすぐ日が落ちるから、しばらくすれば家のドアが開くはず。ドキドキうるさい鼓

動を落ち着けるように深呼吸した。

空に一番星が輝き始める時間、いつも通り家の扉が開く。

「お、おかえりなさい！」

すこし上ずった声で出迎えるわたしと、テーブルに並ぶ料理を見て、ローデリヒさんは目を丸くした。

「なんだ？今日は気合入ってるな」

ローデリヒさんはよしよしとわたしの頭を撫でてから、上着をハンガーにかける。そわそわしているわたしに首を傾げてから、何かに気づいたようにローデリヒさんは笑った。

「今日のドレスかわいいな。別嬪さんがもっと魅力的になってる。よく似合ってるぜ」

さらりと褒めてくれて、わたしは頬が熱くなる。どうせ誰にでもこんな感じ

なんだろうとわかっているのに浮かれてしまおうわたしがいた。

「さ、座ってください。ローデリヒさんのすきなもの、たくさんつくったんですよ」

赤い頬をごまかすように夕食をすすめる。首元のシャツを緩めながらテーブルについたローデリヒさんはテーブルに並ぶ料理に目を見張る。

「お、うまそうだな。いただきます」

さっそくサーモンパイに手を伸ばして、ローデリヒさんは嬉しそうな声をあげた。

「うん、うまい。さすがフィーニちゃんだ」

あつという間に一切れ平らげて、指まで舐めている。気合を入れて作った料理がどんどん空になっていくけれど、わたしは緊張で食事があまり手に付かない。

「どうしたフィーニちゃん、あんまり食べてねえじゃねえか」

「い、いや、たべるっ、たべますっ！」

近くにあった肉のワイン煮込みを慌てて口に運ぶ。自分でもわかるほど不自然なわたしに、ローデリヒさんが気づかないはずはない。

「なんかオレに言いたいことがあるんだろ？フィーニちゃん。ほら、遠慮しないでオジさんにおねがいしてみなさい」

「う、その、あの」

スプーンを置いて、膝の上でぎゅっと拳を握りしめる。ちらりとローデリヒさんに視線を向ければ、目元を綻ばせてやさしい顔をしている。普段おちゃらけた言動も多い人だけど、真面目な顔を見ると、垂れ目で甘い顔立ちなのがよくなる。目元にうっすらと浮き上がる皺ですら、積み重ねた年月がローデリヒさんの魅力を引き立てている。気づいたら全部すきになってしまっていて、

かっこいいなあと思う。

きゆうっと締め付けられる胸の疼きに背中を押されて、わたしは深呼吸してから一気に想いを伝えた。

「あ、あの、わたし、もう子どもじゃありませんから……！だ、だから、ローデリヒさんの、ほんとうのお、奥さんにしてほしい、です」

——言ってしまった。

いまさら返事を聞くのが怖くなるが、もうあともどりはできない。ローデリヒさんは困ったように頭を掻いている。部屋をつつむ沈黙が重苦しい。ああ、やっぱりだめなのかなとつんと鼻の奥が痛くなつて、視界がにじむ。

がたつと椅子を引く音がして、おもむろにローデリヒさんがわたしに近づいてきた。ローデリヒさんはわたしの目元をそつとぬぐい、すっぽりとその腕の中におさめてしまう。

「なっ、ローデリヒさん」

「……せつかく、人が我慢してたのに」

「えっ？えっ？」

低く甘い、掠れた声が耳元をくすぐる。困惑したまま動けないしていると、ローデリヒさんがわたしの顔をのぞき込んできた。

「……正直、最初はフィーニちゃんをオンナとしてみてなかった。でもフィーニちゃんといること、オレの荒んだ生活が変わったんだ。だんだん綺麗に成長していくフィーニちゃんを間近で見て、すっかり参っちゃった。でももしオレから迫れば、フィーニちゃんはうなずくしかないだろ？」

「そ、それは」

確かに後ろ盾もない少女が、自分の生活の面倒を見てくれている大人の男の要求を跳ねのけるのは難しい。

「でも、ローデリヒさんはそんなことしない。だからわたし、ローデリヒさんのことを好きになったんだもん」

まっすぐに目を見て伝えると、ローデリヒさんは一瞬面食らったようか顔をしてから、くしゃっと笑った。

「たつく、フィーニちゃんにはかなわねえなあ」

ひとしきり笑ったあと、ふいに真剣な表情になってわたしを見つめ返す。

「ずっと大切にする。オレのほんとうの嫁さんになってくれるか？」

琥珀色の瞳が甘く蕩ける。ローデリヒさんの背中に手を回して抱き着いて身体を預ける。

「はい、よろこんで」

ローデリヒさんはわたしの背中を撫でて、ゆっくりと後頭部に手を回す。顎をくいと持ち上げられて、唇が重なった。

「んっ」

すこしかきついた柔らかくて熱い唇が触れて離れる。一瞬の感覚を惜しむように自分の唇に触れる。じいっと食い入るようにローデリヒさんを見上げれば、ふっと口元を緩める。

「まったく、フィーニちゃん。そんな物足りなさそうな顔してると食っちゃまうぞ」

「い、いいですよ。ローデリヒさんになら」

自分でも驚くほどに、素直になってしまふ。恥ずかしさもあるが、それよりもいとおしい気持ちが増えたとまらない。大好きな人にただ純粹に庇護する対象としてではなく、ひとりの女として接してもらえて、頭がぼわぼわとするような多幸感に包まれていく。

「フィーニちゃん、口開けな」

言われるがままに口を開く。再び唇を重ねられて、ぬるついたものが差し込まれてびくんっと肩が震える。

「フィーニちゃん、大人のキスだよ。かわいい？」

ローデリヒさんの赤く濡れた舌を見せつけられる。わたしがおそるおそる舌を伸ばせば、ちよんっとローデリヒさんのそれに触れた。くちゆくちゆとすり合わせられると、あたたかくてぬるついて、少しざらざらしている。はじめての感覚に戸惑いながら、ぞわぞわと背中に甘い痺れが駆け抜けていくのがわかった。戸惑いながら肩を震わせていると、顎を指ですくわれて、深く唇を重ねられた。ローデリヒさんのあたたかい舌が、わたしの口腔を自由に探索しはじめた。歯列や上顎をなぞられて、気持ちいい場所を探されているみたい♡

「んっ♡んふっ♡」

上顎の柔らかい肉をなぞられた瞬間、腰がビクンっと跳ねて足に力が入らな

くなった♡太ももを震わせるわたしの腰をがっしりと掴んで、ローデリヒさんが支えてくれる。

「キスだけでトロトロになっちゃって、かわいいね。フィーニちゃん。オジさんが支えてあげるからもうっと感じていいんだよ？」

頭をくらくらさせながら、広い背中に縋りつく。舌を擦り合わせる感覚でもおかしくなりそうなのに、くちゆくちゆとした水音が頭の中に響いて、いままを感じたことのないもどかしさに身もだえる。お腹の奥が熱くなって、目の前のローデリヒさんがほしくてたまらない♡

わたしはほとんど無意識にローデリヒさんの足の付け根を撫でた。

「っ、いけないコだな、フィーニちゃん。もしかして誘ってるのかい？」

「んっ♡んふっ♡んんっ♡」

ローデリヒさんの大きな手のひらがわたしの身体をまさぐる。ドレスの上か

ら腰からおしりのラインを撫でられて、身体が跳ねる。

ちゅっ♡と大きなリップ音を響かせて唇が離れる。二人の間に唾液の糸が伝って、ぷつぷつと切れた。

「あ……♡」

「フィーニちゃん、オジさんのベッド行こうか？」

低く掠れた声で囁かれて、身体が熱くなる。吐息を濡らしながらうなずけば、ローデリヒさんが軽くしゃがみこんで、わたしの太ももの裏に手を回す。そしてそのままわたしの身体を軽々と持ち上げた。

「きゃっ」

突然の浮遊感に戸惑ったが、お姫様抱っこされているのだと自覚したとたんに顔が赤くなる。やさしくリードしてくれるローデリヒさん、やっぱりすきだなあと実感して、これから何をされるか想像して頬が熱くなった。

「さあ、フィーニちゃん。オジさんがたくさん甘やかしてあげるからね♡」
優しくベッドに身体を下ろされて、ドレス留め具を外される。

「大丈夫？緊張してる？オジさんに全部任せてね」

安心させるように、顔じゅうにキスの雨を降らせてくれる。その間にドレスはすっかり脱がされて、下着だけの姿にされてしまう。いつの間にと困惑していると、おっぱいをすっぱり手の内におさめられてしまった。

「んっ♡」

手のひら全体で、やわやわと揉まれているだけなのに触れられた場所が熱い♡布の上から触られてるだけでこんなになっちゃうのに、直接触られたらどうなっちゃうんだろう。そんな心配をしていたら、ローデリヒさんの腕が背中に回る。器用に片手だけでコルセットを外されて、布をそのままを引き抜かれた。いともかんたんに、おっぱいがあらわになってしまう。

「あ♡」

大人になったのに、あまり成長しなかったそこをまじまじと見られて恥ずかしい。視線を感じてぶくっ♡と乳首が頭をもたげてしまう♡いやらしい子だと思われぬだろうか。

「へえ、フィーニちゃんのおっぱい少し控えめでキレイだね。オジさん好み♡」
かるくおっぱいを持ち上げられながら、人差し指と中指できゅっ♡と乳首を挟み込まれる。

「んっ♡あっ、なんかへんっ」

「もしかしてフィーニちゃん、自分でしたことないの？」

「な、ない、ですっ！」

とっさに嘘を吐くが声が上がってしまふ。楽しそうにやにやとしているローデリヒさんはおそらくお見通しなんだろうけど、深入りはしなかったので

助かった。

「じゃあ、オジさんがフィーニちゃんに気持ちいいこと教えてあげる♡」

乳輪をかわいがりながら徐々に指先を先端に移動させて、乳首を抜かれる。

ビリッ♡と痺れるように疼く胸の飾りがきもちいい♡何度か自分で可愛がったけれど、むず痒かったただけなのに♡大好きな人に触られるとこんなにかがうんだ♡

「や、あっ♡」

「んー？どうした？どう？フィーニちゃん、ちゃんと気持ちよくなれてる？オジさんにおしえて？」

にやにやしなながら問いかけられる。指先で乳首つまんでこりゆこりゆ♡とやさしくねじりながら左右にひねられる。

「ひうつ♡きもちいい、ですっ♡♡」

「そっか♡かーわいい♡」

素直に白状すれば親指の腹でやさしく乳首の先っぽをすりすり♡ってかわいがられ始める。ひくんっ♡と誰にも触れられたことのない場所がうずいて、とろっ♡と潤んでいくのがわかる。

「フィーニちゃんは先っぽがすきなのかな？かわいくていやらしい乳首だね♡
オジさんがもーっといやらしくてかわいい乳首に育ててあげる♡」

ぷくっ♡って膨らんだ乳頭にカリっ♡と爪を軽く立てられて、喘ぎ声が漏れてしまう♡

「あ、あんっ♡」

「素直でかわいいなあ、フィーニちゃんは。ほんと、かわいくてたまになくなっちゃまう」

ローデリヒさんが舌なめずりして、わたしのおっぱいに顔を近づける。そし

て胸の膨らみのラインをゆっくりと舐めたあと、ぱくっ♡と乳首を口のナカに招き入れた。

「ひゃうっ♡」

ぬるぬるとしたあたたかい粘膜が、弄られて敏感になった乳首を包み込む。いっぱい唾液をしみこまされて、じゅっ♡と思い切り吸われた。口にいれてないほうの乳首はこりゅこりゅ♡って指ですりつぶされて、左右違う刺激で器用に愛されていく。

「あっ、やあ、ローデリヒさん♡」

「ああ、ごめんな。こっちもオジさんのおくちのなかでかわいがってあげないとね♡」

ちゅぽっ♡と今まで吸われていた乳首から、ローデリヒさんが口を離す。そして今度は逆の乳首にちゅっ♡とキスしてしゃぶりつかれた。

「あっ♡んんっ♡らめっ♡」

「んゝ、なにがだめなの？こんなにかわいくコリコリして、おじさんの舌、押し返してくるよ？」

ちゅぱちゅぱ♡舐めしゃぶられて、おマンコがきゅうっ♡と収縮して期待しちゃう♡乳首をしゃぶりながら、さっきまでちゅうちゅう吸われてた、唾液でぬるぬるにされた乳首を指でこねこねされる♡どっちも気持ちいい♡まだおっぱい触られただけなのに、太ももがふるふる震えてしまう♡

「あ、あんっ♡きもちいい♡きもちいいですっ♡♡」

「はは♡フィーニちゃん、もうとろとろの顔してるね♡」

とどめとばかりに、ちゅうううっ♡と強く乳首を吸われて、きゅっ♡きゅっ♡指でぬるぬるの乳首を磨かれる♡ローデリヒさんの頭を抱えて、喉を反らしてしまっ♡

「あ♡ああっ♡へんっ♡へんなのくるうっ♡」

「いいよ、フィーニちゃん♡へんになっちゃえっ♡」

ローデリヒさんの舌が乳頭に食い込んで、その状態で舌を小刻みに動かされた。ぶるぶるっ♡って敏感な突起の一番弱いところ責められて、なにもかもはじめてのわたしが対抗できるわけない♡

「あ、あああっ♡らめっ♡♡くるっ♡やああっ♡なんかきちゃうっ♡」

びくんびくんっ♡と身体が痙攣して、頭が真っ白になる。頭がふわふわして、なにも考えられない。息を整えるだけで精いっぱいなわたしの髪を、ローデリヒさんがやさしくなでる。

「ちゃんとイケてえらいね♡フィーニちゃん♡」

耳元で囁かれて、そのまま耳たぶにキスされる。それだけで大げさに肩を跳ねさせるわたしに、ローデリヒさんはくすりと笑った。

「ひゃう♡」

「もーっと、気持ちよくしたげるから、期待していいよ♡」

淡いピンク色のショーツを見て、かわいいね♡って褒めるローデリヒさん。

いやらしいシミができているクロッチ部分に指を這わせた。

「やっ♡」

「うんうん、フィーニちゃんの身体はすぐ素直でかわいいねえ♡ご期待にそえるように、オジさん頑張っちゃおうかな？」

薄い布ごしに肉芽をすりすりとお撫でられて、くち♡くちっ♡と粘着質な水音が寝室に響く。

「エッチなシミどんどん広がってるよ♡オジさんのこと大好きだからはじめてなのになんかになってるの？ほんとうにかわいいね♡」

ひたすらかわいいかわいいとあまい言葉を囁かれながら肉芽を愛撫されて、

ひくひくとおマンコがうずいているのが自分でもわかる♡大好きな人とつながりたい♡って、身体が勝手に準備はじめちゃってる♡

「そ、そうです♡ローデリヒさんにされてるから、わ、わたし、こんなに感じてしまってるんですよ♡」

恥ずかしさを抑えて伝えれば、ローデリヒさんはにやりと口角を上げてショーツを足から抜き取ってしまう。直に肉芽に触れられて、すりすり♡と左右から優しく、揉み込むように愛撫された。

「ん♡あ♡にゃ、にゃにっ♡」

「フィーニちゃんがかわいいこというから、オジさん張り切っちゃうね。女の子の大好きなかわいいお豆さん、たくさんかわいい♡かわいい♡してあげる♡」
左手の指でぐにっ♡とクリトリスを左右にやさしく広げられて、もう一方の指で左右から挟み込むように愛撫される♡

「おっ♡フィーニちゃんのお豆さんちっちゃくてかわいいのに、こりゆこりゆしてピンピンに勃起してエッチなお汁たらしてる♡えっろいなあフィーニちゃん♡」

根元から先端に、くすぐるくらいの弱い力で何度も指が往復する。きもちいいのに♡強い刺激がほしくなる♡こんな弱いのが足りないよう♡

さすがのようにローデリヒさんに視線を向けると、意地の悪そうな笑顔を浮かべから、小さな豆をすり潰すようにくりゆくりゆ♡と円を描くように押し込まれる♡

「や♡お♡あっ♡んおっ♡」

望んだ刺激に濁った声をあげながら、ほとんど無意識にへこ♡へこ♡って腰を前後に振ってしまう♡ローデリヒさんにエッチなこと教えられて、素直に全部反応して、もっともって教えて♡って身体で媚びてるの♡

「フィーニちゃん、クリイキシちやいそうかな？いいよ♡いっぱい気持ちよくなって♡」

二本の指でくにゅくにゅ♡とお豆をすり潰されて、びりびりする甘い電流が脊椎を駆け上がってくる♡おマンコいじめられて、乳首もジンジン疼いてしまふ♡さっきの気持ちいいの思い出して、わたしはとっさに自分の乳首をつまんでしまった♡

「あ♡あう♡んんっ♡おっばい♡おっばいさみしっ♡やあっ♡きもちいい♡」
こりゅこりゅ♡くにゅくにゅ♡

ローデリヒさんにクリトリス押しつぶされながら、自分の乳首をいじってしまふ。はしたないことしてゐるってわかってるのに♡おっばいいじめ♡やめられない♡

「はは、フィーニちゃんったら♡自分でおっぱいいいじって、オジさんがかわいがってあげたのそんなに気に入っちゃった？えっろいなあ♡ほら、エッチなお豆さんでもいっぱい気持ちよくなるんだよ♡」

左右から挟み込むように愛撫していた指が、今度は左右から揺さぶるように動かされる。真っ赤に腫れてトロトロ愛液垂れ流す敏感なクリトリス♡ローデリヒさんにはぶるぶるされて、おかしくなるほど気持ちよくなっちゃう♡

「んあ♡ローデリヒしゃ♡」

骨ばった指でクリトリス包まれてブルブルされると♡あっという間に高みに昇っていく♡

「んお♡しよれ、すきい♡あっ♡またっ♡くるっ♡きちやう♡またきもちいいのくるのっ♡」

「うんうん、オジさんの前でいっぱいクリイキしような♡ほら、フィーニちゃ

ん。オジさんにエッチなお豆さんシコシコされてイっちゃいます♡って、かわいく言ってごらん♡」

「ずあ♡あっ♡イぐっ♡んっ♡くりちゃ、きもちいい♡♡♡ローデリヒさんにエッチなお豆さん♡♡シコシコされて♡♡♡イっちゃいましゅっ♡ざっ♡イグっ♡」

がくん、がくんっ♡って腰跳ねさせながら、乳首をぎゅううう♡と引っ張って絶頂する。目の前が真っ白になって、身体が勝手にびくびく痙攣して止まらない♡

「上手にイケたねフィーニちゃん。オジさんうれしいよ♡」

「はーっ♡はっ♡」

ちゅっちゅっ顔中にキスをされて、しあわせな気持ちでいっぱい満たされていく。ジンジン疼くおっぱいをすりすり撫でながら、ローデリヒさんが囁

いた。

「ひゃう♡」

「でも、もーっと気持ちよくして、フィーニちゃんの処女マンコトロトロにしてあげるからね♡」

ローデリヒさんがわたしの太ももを持ち上げて、左右にぐいっと開く♡まだ絶頂の余韻でピクピク♡って震えている太ももをいやらしい手つきでなで回しながら、わたしのおマンコをじっと観察している。

「キレイな処女マンコだね♡フィーニちゃん♡♡」

ぐにっ♡と蜜口を開いて見つめられる。いやらしい視線でおマンコ凝視されて、それだけでまた濡れてしまう♡

「うわ♡ピンク色の粘膜がくぱくぱ♡って痙攣して、すっごいエッチだよ♡オジさんに見られただけでうれしくてよだれ垂らしてる♡」

「や、やだっ♡そ、そんなとこ見ないでくださいっ♡」

「だーめ♡フィーニちゃんのかわいいところ、みせて♡」

身をよじって逃げようとするわたしをローデリヒさんは簡単に抑えつけてしま
う。がっしりと太ももを掴まれて、おマンコ丸見えの恥ずかしいポーズで固定
されてしまった。